



## 多くの母親・保育者のために

### — 大和郷幼稚園座談会 —

向山陽子

M 本日は、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。このたび、『幼児の教育』誌編集部から、読者である本園のお母様方、教諭の皆様から、本誌にまつわるエピソードなどをお聞きしてほしいとの依頼がありました。また、本誌バックナンバーを「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション」TeaPot」上でインターネット公開することになったとのことで、この件に関しても皆様の思い、今後への期待などをお聞かせ願いたいとのことです。どうぞよろしく願っています。

O 私は、もう二十数年前になりますが、この園で幼稚園教諭として子どもたちとの毎日を始めたころ、影響を受けたと思える先輩たちが読んでいらして、私も読み始めました。職場を離れ、子育て中も読みました。子どもの幼稚園の先生方も愛読者で、コピーして、幼稚園のママ仲間と読み合ったりもしました。

K 私はここ数年の読者です。やはりこの園に勤めてから読み始めました。最近では、戸田雅美先生の「子どもと保育の情景」を一番に読みます。また、



『幼児の教育』  
（第105巻第11号）2006年  
特集：日本の幼稚園教育  
百三十周年を迎えて

「保育の現場から」の文章にもどうしても飛びついてしまいます。それから、存じ上げている大学教授の方々の若かりし保育者時代の姿などが描かれていたりすると夢中で読んでしまいます。

H 私は、この園に息子がお世話になっていました。

M園長先生からのお薦めの本だということで読み始めました。はじめは、正直に言いますと、あまり期待していませんでした。でも、読み始めてびっくり。

六十四頁しかないのに、中味はぎっしりで、とても読み応えがあります。今はこれで五百五十円は「お得」が実感です。ただ、年に一回しか園長先生

が宣伝なさらないので、ぐっと来る文章を読んだ後にはもっと宣伝なさればいいのと思えます。先ほど、

O先生がお子さんの幼稚園でコピーして読み合ったというお話を伺って、園長先生が、「子育て何でもtalk」（園長と保護者との井戸端会議）でコピーして下さるのを待っているだけだったなとちょっと反省しています。

Y 私は、娘が園にお世話になっています。実は、結婚前は幼稚園で保育者でした。恥ずかしながら、『幼児の教育』誌はこの園で知りました。大学時代に、お茶の水女子大出身の教授に教わっていました。M園長先生からのお薦めがあり、幼稚園を通して購読していますが、書店を通じて購入も可能なのです。わが家では夫も読みます。企業で働いていますが、おもしろいようです。最近の「特集・生活を保育へ」は、夫婦の話題にのぼり、子育てに関して夫とちよっと深い話をするきっかけになっています。

M ご夫婦でどんな話をされるのですか？

Y あれは確か、おむつを外す話でした。ちょうど下の子がおむつを外す時期で、お姉ちゃんときは何も考えずに育児書を読んでイライラしながら、でもそれほどの苦勞もなく取れたのですが、下の子は……。子どもが二人になって幼稚園もあるし(笑)。

そんなとき夫から、「あれ読んだ？」って話しかけられたんです。「おむつを外すって子どもからしてみれば、なんて考えたこともなかったよ」って。私からしてみれば、「夫が私と息子のおむつ外しに関心があったなんて！」って感じなんです。うれしかったです。その夜は子どもを寝かしつけてからおむつ話に花が咲きました。

O 私も、『幼児の教育』誌で、目からうろこの体験を何度もしました。今でも、印象深く覚えているのは、アレルギーのあるお子さんをおもちの方の文

章です。私の息子もアレルギーがあり、除去食や掃除に、下着の素材にと躍起になっていました。母親がするべきこと！と、自分も周りも「べきこと」にしばられていたときに、「この子と私がこういう生活をしていることの意味」「今、この子と私がこうしていること」のようなが書かれていて、ハッとしました。あのときから、子育て全般に焦ることなく気持ちがゆったりできるようになったかと思えます。そういう意味では、私にとつて三人の子育て中も『幼児の教育』誌はありがたい存在でした。

今はまた現場で、お母様方や若い保育者の方たちと保育する中で、『幼児の教育』誌を熟読する日々



【幼児の教育】  
(第106巻第12号) 2007年  
特集：生活を保育へ  
表紙絵：林 建造

です。本誌の、子どもの側からの視点に徹した姿勢に学ぶことが多くエールを送ります。執筆者の多くの方の文章が、読み手に優しく、寄り添っていてくれるようで、子育て・保育に力がわきます。

K ハンディーで、通勤の途中ででもすぐに取り出せて読めるのがいいです。出勤の車内で読み、その日の保育する姿勢が変わったこともありました。影響を受ける小論に出合うことが多いので、これからも読んでいきたいと思えます。この園でも、今半分以上の先生が購読しています。

ネット化されることでより多くの人が読みたい小論を読めるようになることはよいことだと思えます。しかし、アクセスしないと始まらないわけで、執筆者・内容・時代などからもアクセスできると、ネット化した意味が出てくるのでしょうか。

H ネット化されて、定期購読数が減ってしまう心配はありませんか？ 私はまだ本は手に持って読む

派なんです。線を引いたり折ったり、寝転がって読んだり（笑）。先日、園長先生の背後に並んでいる金文字の背表紙の本がこの『幼児の教育』の複製版で、一〇七年続いている由緒ある月刊保育雑誌だと知りました。日本の保育誌としてさらに百年後まで続いてほしいと思えます。

M 四十年近い昔に、お茶の水女子大学附属幼稚園に『幼児の教育』誌の編集部があり、恩師と編集員の方がお話しされているのを見聞きしたのが本誌との出会いでした。拙文を載せていただきました。二十数年前には編集する機会も与えられ、扉題字を津守眞先生に書いていただきました。定期購読数の悩みはそのころからありました。今日、先生たちだけでなく、お母さんたちからのお声を聞くことができ、大変うれしく思いました。今日はありがとうございます。

（大和郷幼稚園 園長）